

大相撲テレビ観戦印象雑記
～平成25年7月場所を終えて～

<1> 白鵬26回目の優勝、しかし・・・

今場所は、各段の優勝が13日目に確定してしまうという珍しい場所になった。

白鵬が優勝することについては、ほぼ予想がついていたので驚きはないが、むしろ脇腹の筋肉を痛めてしまって全勝優勝ができなくなったことの方が予想外だった。

膝が曲がり、しっかり腰が下りた安定した態勢で、しかも攻められることがあっても「機を見るに敏」を地で行くような取り口では誰も刃向かうことができない状態だった。ところが、中で何日か土俵際であつと驚くような対応をしながら辛勝する場面が出てきた。「これは？」と思っている内に怪我に至った。

その結果として、13日目に優勝を決めはしたものの最後の二日間を黒星で締めくくる見栄えの悪い優勝になった。表彰式後のNHKのインタビューでの表情も応答の内容も全く冴えないものだった。

ことの顛末は白鵬自身がよくわかっているだろうから、ことさら騒ぎ立てることもあるまい。

<2> 日馬富士そして稀勢の里

日馬富士は辛うじて10勝5敗の成績で終ることができたが、本来ならば9勝6敗であるべきところを白鵬の怪我が救ってくれたものと見ている。

平幕に2敗・三役に2敗という状態ではとても優勝に絡める状態ではない。横綱審議委員会が何らかの指導的なメッセージを発する？という情報が流れたが、それも不思議な気がする。「連続優勝もしくはそれに準じる成績」という瞬間最大風速だけで昇進させてしまった協会と横審がいまさらこんなコメントを発するのは不自然な気がする。

「稀勢の里の綱取り」という騒動にも日馬富士と同様の空気を感じる。大関としての自覚と実力が備わって来ると「優勝を争う」という形での活躍が現実のものとなって来る。何度か辛酸をなめながら優勝を勝ち取ることができるようになって行くと、その間の労苦が人をも磨く結果となる。そうすると横綱の地位を手にすることができることになるというのが昔ながらの流れである。今その途上にある大関に対して、相撲協会の理事長の要職にある者までが、「綱取りだ！綱取りだ！」と騒ぎ立てるのは如何なものか？瞬間風速で昇進させてしまった横綱に困っている状態で、また（まだ？）同じことをやっている。

相変わらず「腰高と右の脇の甘さ」が勝敗を分けている感じがする。場所前の稽古で時々見せていたようだが、「右前みつ狙い」の相撲を覚えることで腰が下りてしかも持ち前の前進力が生きて来るように思うが。

今、稀勢の里は辛酸と労苦の中でもがいている。じっとその成長を見守る度量が必要ではないか。

<3> 大関の負けっぷり

横綱が二人、大関が四人の番付である。番付の並び上自分より格上の力士にだけ負け、格下相手にはすべて勝ったとしても10勝5敗しかあげられない。格下のものに負けない（取りこぼしをしない）で、自分より上位（横綱）に勝つ者が抜け出すことができる。

しかも大関と言う地位は幹部のポジションなので、一場所負け越しただけでは陥落しないと優遇されている。そんなことを考慮すれば、9勝6敗や8勝7敗では非難されぬわけがない。

今場所は四大関が全員勝ち越しをしたものの、その負け方を分類して見たらこんな表ができた。ムードや瞬間風速にとらわれることなく、六場所ぐらいのレンジでの様々なデータで捉えて見ることも必要ではないか。

力士名	稀勢の里	琴奨菊	鶴竜	琴欧州
今場所の成績	11勝4敗	9勝6敗	10勝5敗	9勝6敗
上位に負けた数		2	2	2
同格に負けた数	1	1	1	2
下位に負けた数	3	3	2	2

<4> 関脇・小結は戦国時代か

安定した関脇になってきたのではないかと思われた妙義龍と豪栄道は、いずれも千秋楽に勝ち越すという危ない橋を渡った。この二人の関脇は対照的な側面を持っている。

足腰の備えと運びに安定感があって、攻めに型がある、基本がしっかりできているのが妙義龍。

かたや豪栄道は器用に何でもこなすタイプではあるが、相手の出方に合わせて取る受け身の相撲が多い。勝てる関脇・負けない関脇になるためには何が必要かを投げかけてくれる面白いサンプルである。

「いずれは大関・横綱」と騒がれていつも注目を浴びて過度の期待に囲まれて育った豪栄道、大学相撲から角界入りしたものの大怪我で陥落した後に復活した妙義龍。

番付の上でもライバルであるが、同じ部屋の力士としてもライバル関係にあると思われる。通常的环境下では二人の直接対決はあり得ない。今後のつばぜり合いに期待したいと思う。

小結は毎場所頻繁に入れ替わっている。つまり群雄割拠の戦国時代である。出入りの激しい栃煌山の後に高安・千代大竜・勢等が迫ってきている。この中を切り抜けて来るのは誰だろう？

<5> 活躍が目立った平幕力士

前述のように、高安・千代大竜・勢など次の世代を担うと思われる若手が伸びて来ている。

粘り強い相撲から素早い相撲まで幅広い相撲をとる高安は見ている面白い。平成生まれの若さながら少々のことでは顔を崩すことがない毅然とした態度は松鳳山（昭和59年生まれ）と並んで双壁。

千代大竜は近頃見なくなった「かちあげ」や「ぶちかまし」ができる突き押しの力士。激しい突き・押しの後で叩きや引きで勝負を決める癖がある。日馬富士・稀勢の里を破るなど高い評価を得た相撲はこうしたところであったが、結果的には7勝8敗に終わり、三賞は逃した。攻め一本の相撲に徹すれば、さらに上を目指すことも可能であろうが、現時点では未知数。

勢は、三日目の富士東戦で相手の髷に手が入ってしまい反則負けと言う不運に見舞われたが、9勝6敗は立派な成績と言える。四つ身の巧さ、速さ、粘り強さなどが相まって良い相撲がとりきれている。毎場所少しずつ向上・進化を続けている感じがするので、横綱・大関陣とも顔を合わせることになる来場所の活躍に期待したい。

新入幕の徳勝龍は若々しい真面目な取り口で、再入幕の琴勇輝は突き押し一本の活気のある相撲で、それぞれ活躍し勝ち越した。来場所の動きが楽しみな力士達である。

<6> 今場所気が付いた出来事

三日目の勢・富士東戦で「髷を引っ張ったので反則」事件が起きてから、類例が発生する度にテレビの解説者もこの件に対する数多くのコメントを発していた。中でも北の富士さんの提案は解りやすいものだった。

「意図を持って髷を掴んで引っ張る」という行為を禁じるためにできたルールであるが、通常の見方の中でのこのようなケースは極めて少ない。殆どの場合、戦いの流れの中で偶発的に指が入ってしまっただけでなくなったケースのようである。彼の提言は「意図をもって掴んだことが立証できないようなケースの場合には不可抗力と見て取り直しとしたらどうだろうか？」というものだった。

いずれにせよ、この状況が発生するのは「叩いてその場をしのごう」とする相撲の場合で、積極果敢な攻めを基調とした取り口では起きにくい。

相変わらず立ち合いの「手つき不十分」や「待った」が横行している。立ち合いのルールが明確になっていないことが一番大きな原因と考えられる。

「腰を下す」「両手をつく」の手順が定められているが、腰を下さない力士がかなり存在する。また手つきについては、「片手をついた後でもう一つの手が土俵に触れる」方式と「両手が土俵に触れる」方式の二つが存在し、しかも「きちんと手を下す」と「チョンつき」の双方が認められてしまっている。このため立ち合いの動作と呼吸の合わせが困難になっている。古来のルールどおり「両手をつけて立ち上がる」ことに一本化する必要があるように思う。力士達の立ち合いの所作の正確度を見ていると、部屋ごとに共通している感じがする。つまり部屋の師匠の指導がおおいに影響しているように思える。

以上